

石川勇一著 『心を救うことはできるのか』

— 心理学・スピリチュアリティ・原始仏教からの探求』

サンガ (2019)

合田 秀行 日本大学*

Ishikawa Yuichi, *Is it possible to save your mind?: The research from the view point of the psychology, spirituality and the primitive Buddhism*

GODA Hideyuki

冒頭でまず一言お断りしておきたい。書評に客観性を求める必要はないのかもしれないが、単に内容構成を紹介したり、細かく批評を加えたり、という類いの文章よりは、仏教研究に関わる立場から、また真理を求め続けつつある一人の同志として、極めて主観的な文章にならざるを得ないのである。評者には、石川勇一氏（以下、著者とする）の心理学やスピリチュアリティに関する知見を論評するような資格はなく、主要なテーマの一つである原始仏教をどのように捉えているかを中心として、私なりの所見を述べることは可能である。当然、そのような事情を踏まえての書評依頼であろうと忖度している。

本書の表紙に記された肩書きにも、著者は「行者」を加えている。この経緯は、著者自ら本誌への寄稿論文や学術大会などを通して語っているので、敢えて補足するまでもないが、修験道、アマゾンのネオ・シャーマニズム、そして上座部仏教（原始仏教）の世界で、修行や深い体験を重ねてきた現実を近くで見えてきた者として、少し触れておかなければならない。

以前、著者と松本孚氏と一緒に、定期的に関

催していた東京基礎研究会の世話人を担当して以来、著者との交友関係は長きにわたる。ある番組の感想を発端に意気投合して、修験道の大峯千日回峰行を満行された塩沼亮潤阿闍梨の慈眼寺（仙台市）をともに訪ねたこともあった。その頃からも著者が抱え持つ「行者」としての片鱗を感得していたが、もはや片鱗どころか、自他共に認める行者となって現在に及ぶことになる。

本稿を執筆中にも、本学会の運営に関連して著者に連絡を取ったところ、インドの仏蹟巡礼を終えて、空港から自宅に着いたばかりであった。電話越しの短い会話ながら、実際にブッダが禅定に入り、法を説き、弟子たちと歩み、弟子たちと寝食をともにした地を辿ってきた何とも表現を超えた感慨深さがひしひしと伝わってきた。さらに2020年は、年明け早々から3月末までタイで短期出家して、比丘として修行に打ち込むという。大学の雑務に追われ、しばしば不飲酒戒を破っている我が身を恥じるばかりである。

仏教には多様な流れがあり、国内だけでも多くの宗派があるにもかかわらず、著者が原始仏教・上座部仏教に強く惹かれるのは、「行者」としての資質と密接に関係があると私は考えて

* goda@chs.nihon-u.ac.jp
日本大学文理学部哲学研究室
〒156-8550 東京都世田谷区桜上水3-25-40

いる。本書の第3章「原始仏教」の冒頭では、原始仏教を取り上げる理由の一端が、このように明記されている。

日本で歴史的に根づいてきた仏教の宗派はいずれも大乘仏教ですが、大乘仏教と原始仏教とは、かなり異質だからです。(本書p.128)

さらに仏教の受容を巡る経緯が通観されて、その最後に明治以降にパーリ語で書かれた原始經典が文語体で和訳され、浩瀚な叢書として刊行されたこと、さらにより理解しやすい現代語への翻訳作業も精力的に進められている一方で、上座部仏教の比丘が来日され、指導されている実情に言及している。これらの動向が、日本の仏教界に新たな可能性を惹起させている点は、確かに注目すべきである。

また、「大乘非仏説」に言及したり、「大乘仏教は捉えどころがなく、信頼してよいのかどうか決めかねる不確かな印象を私は抱いていました」(本書p.176)という著者の思いが述懐されたりしているが、それとは対照的に上座部仏教の比丘が語り出す言葉に確かな手応えを覚えたとして、原始經典の世界に誘われた過程が述べられている。

これに関連して、本書の目的からすれば、本質的な問題ではないものの、指摘しておきたい点がある。ブッダ入滅の百年後に上座部と大衆部に根本分裂した経緯を踏まえて、著者はこの大衆部を大乘仏教とほぼイコールに捉えているのは、修正が必要であろう。大衆部の流れから大乘仏教へ発展したとする説もあるが、現時点では諸説の中の一つに過ぎない。大乘仏教の起源を巡っては、現在の仏教学の世界でも議論が継続していて、その起源には多元的な要素があると考えるのが一般的である。膨大で多様な大乘經典の淵源を一つの流れに限定するのは、不

可能である。

さらなる脱線となるが、2年前に翻訳されたリチャード・ゴンブリッチ博士の『ブッダが考えたこと—プロセスとしての自己と世界—』(浅野孝雄訳、サンガ、2018)を紹介する文章を書いたばかりである。ごく簡潔に言えば、厳密な原始仏教研究を踏まえた上で、神秘的な観念を排して、とりわけ心に関する合理的分析と業の理論の視点から、ブッダ観を展開している大著である。

しかし、2009年に発表されたが、仏教研究に関わる者によって翻訳されることなく、脳神経外科を専門とする埼玉医科大学名誉教授・浅野孝雄氏によって翻訳された。この中で言及された大乘仏教全般に対するゴンブリッチ博士の理解によれば、業に関する理論の役割が軽視され、神格化された存在への崇拜や祈りという性格を強めていった流れと総括されている。ちなみに、博士は長きにわたり、オクスフォード大学サンスクリット語講座の主任教授を務め、現在は英国仏教学協会の会長である。大乘仏教を巡る方向性には何か両者に類似する姿勢を直感するのである。

私自身も仏教研究の最初期は、原始經典に惹かれ、パーリ語も習得し、数年前に教え子である講師に譲るまで、パーリ語の文法や原典講読の講座を担当してきた。次第に大乘仏教の一翼をなす唯識学派(瑜伽行派)に惹かれていったのも、その大成者たちが上座部も含む部派仏教において出家し、厳格に三学(戒・定・慧)の精神を尊びながらも、部派仏教のあり方の批判を通して唯識学派が成立した経緯に関心を持ったからである。実際に、初期唯識学派における修行の階梯や方法は明らかに原始經典の伝統に依拠していた。しかし、より深く、実践的な関心から唯識学派の修行のあり方を探究していこうとすると、実践面の伝統が途絶えている現実が立ちはだかる。これは私にとって袋小路であ

り、学際的なアプローチを視野に入れざるを得なかった。著者がブッダ以来の原始經典に基づく修行が脈々と伝承されている上座部仏教に逢着したのは、必然的な歩みだったように思える。しかし、大乘仏教が興起してきた背景には、現代人にとっても看過できない要素があるように思えるのである。著者には「不確か」に感じるところの背景にも是非目を向けてもらいたい。

本来の書評から掛け離れつつあるが、著者の「悟り」観に少し触れておきたい。著者は、原始經典における預流・一來・不還・阿羅漢という悟りの四段階に注目している。それぞれの段階に対応する特定の煩惱が滅せられる境位として、それらの悟りの基準が明確に説示される。そして、著者はそれを踏まえて、このように述べている。

この基準に照らせば、どのような神秘体験をしようと、どのような歓喜に満ちた至高体験や高原体験（中略）をもとうとも、ブラフマンや非二元を体験したといおうとも、どのような学識や地位があろうとも、どれだけ財産をもっていようとも、煩惱が残っている限り、悟りの流れには入ってはいないということがよく理解できるのです。（本書p.160）

これら四段階の悟りに至る方法論・瞑想法が、原始經典において具体的に示され、今日では上座部仏教の比丘によって、日本にも紹介されている現状を、著者は日本の仏教史上、画期的なことと位置付けている。私もその点はまっ

たく同感である。また、著者はトランスパーソナル心理学で説かれる心の発達段階説と比較して、ブッダが示した基準が圧倒的に厳格であるとしている。ちなみに、唯識学派も所知障と煩惱障とを明確に分け、いかに煩惱による障碍を克服していくのが容易ではないかを説くという特徴を有している。

著者自身も第3章の結びで、原始仏教の可能性とともに限界を指摘しているように、原始仏教の教義を理解し、三学の精神に基づいて、瞑想を深めていくことが万人向けの道とは言い難い。それこそ、仏教との縁であったり、仏教を受容するための準備段階を醸成したり、という要素が欠かせない。その点も十分に踏まえて、著者は最終章で改めて「心は救えるのか」という根本問題に対する見解を述べている。臨床心理学者として、心理療法家として、そして、何より「行者」としての著者が、あまたの経験を歩み続けてきて行き着いた境地は、ブッダの晩年の説法と伝えられている「自灯明、法灯明」の至言に集約されているのかもしれない。

さらに著者には、「犀の角のごとく」に、心を救う道を冀求し続けてもらいたい。私ごときに言われずとも、求道の歩みが止まることはないであろう。仏教で説く真の意味での「法友」とはほど遠い存在ながら、世俗的な一人の同志として心から著者の行が深化していくことを期待したい。蛇足ながら、本書に掲載された比丘姿の著者の写真（本書p.177）を最初に見た瞬間、中世の托鉢修道士アッシジのフランチェスコの幻視が去来したことを書き留めて、書評らしからぬ書評を閉じる。